



研まらぬ外

あぢきぬ

のこ酒飲

た

りか

あぢきぬ

咲月房



永升走帆翁をわらふより又學子より  
且入舟の道と云えり今右稀  
の齡まで一日も書と筆と放しと志  
俟體はる時ハ折を景趣と詠りて  
つねとわれハ舟平あまのつと棒  
鏤りて世人あり見えぬといと或人  
志らるるも是れを自詠り年比  
あひかたぬれと云ふ歌とて

かてくつとく系合船と名つる袖あり  
来られしと身より舟の年ハつとて  
なり其外志人とい歌とわたりと  
趣意と胸くあり詩句とわたりと  
作しあはれ又蓬少れとわたりと  
とてとてとれを帆子の楫のつと  
なれしととてとて便衣とて  
つとつとつとつとつとつとつと

平らら行の櫓拍子れりわらまに  
うらまれりしき年と書りて波  
伏見を回とちふとくのを侍れ種ふ  
年よはるぬき詞書とくくくく  
走帆乃志と進内ならんく

孝下隠子

蜡庵

担弁式長案邊

走帆堂主揮南識

一担弁は真行茶の二時ありと古人といひ事ある  
はるが記さえまはとぬうらわとまうくくくく  
うけらる記をまとい得ぬ人の方におかくハ誂諧歌  
よびらる記と誂諧歌ハ和歌と一辨とて代れ勅撰の  
初立おし入るハ誂諧弁と担弁乃まとい又誂と  
担弁は記をのつれ和弁担弁れとくハあ事と  
知らくく又故事古語とゆふハ或ハ詩文ハ熟語  
なすのちんふんをよ見入るを真とい得ぬ  
軍を而案是又雲泥の心ゆらひなり担弁也

我朝のなまは弁がねの弁安やとて誹諧あり  
らねてとちうらな俗語誠言と仰しうわなれ筋  
よ混せとれを相尋乃真とて子魚一行の中庸とて  
真あり近くまかりしにとれと原安安やとて  
上下照看してまふらふとてとておぼしき  
とてふまはかりとていふもとれははくはく  
とていふまはかりとて世流童謡高河のまかり小弁  
まてま府真とてり趣向まんじとてよむとて也  
右誹諧弁と相尋之所のわれと心はまかりかん  
を免右人と弁とていふ引なまかり一覽は備ふ

はくはく看とてとれは初とわさま志は原  
但老切博識の足はとてはあは初心軍れは  
あま心一助力はまかりとておぼしきなり

弁一誹諧歌

おれりりあまあは流のゆりゆら  
あまらハせて弁とてとれはまかり

白雪はまかり初のまかりあはとておぼしき  
仲文 右原

右雪と初と同一白雪かりと初とト煮らると  
通るいひざしり也まかり和弁の筋とて俗語と不用

弁二相弁真 立春

まかり心とてとれは神垣やと論れ初対の原雄毫



禁制せしむる事いほりぬ行平茶云々五れはよ古人  
乃程寄小一方うひりて既ありてありてまうはつと  
詞心を一轉テしてんてはねまは則相言也時月房の  
平よとけりもの朝と先世での心酒の酔ての及ハ  
らくとまうとさる 此方とうつらうとれと下る  
けくせいのよひまてとまうりれ物話めり一轉して  
けりま也又雄長老庵の平に 去毎よ去年  
より物まらんとぬ自ハそまうとれぬ庵がらうり  
是ハ下うけまうとれと上れ去まうり物のみぬ自ハ  
心れ目まらうりはにがらうりまうとれぬい働働で

功一又貞徳立春乃方に 八か始れりとも吹ふ一  
なうりぬと茶とらうとんらうと風 是ハ上下大  
平安うひりてあれとてれ二字とせぬ九字  
ととも精一はまうとて吹出は節とやうと程あり  
也ながも也又平友永田貞柳と一辰巳年の大火  
はのうたな あひまのの及まらうとぬまはじう  
大事とてまうとらうり平は 是ハ上向古平を一字と  
うとまらうとやひれとぬ字火難とあひま  
れを精一のまうと一は年の月れ去て平とけり  
ハ何の精まらうとらうとぬと下りけりぬ

の道がしこくつとひては凡そ授の心とある一  
され諸の道法な格式より入るしかな下とに便  
なり甚法な格式と守りて致し其理を悟ぬ事ハ  
格式をんがれく自とをんたをの付く格ははす  
應一是と格よ入て格を出るは右の法方れは傳  
がれた導乃を先細く一平思惟をく  
一并れ五句一人の又解カキは初のみ文字とひて二の句と  
胸といひこの句と口れ句乃るを胸と云ふ句めと是と  
候と云也此五句二十一字中よ心の備る事人の又解み  
心此の備る候と一三句の言んがれら奇と胸所

とく煙也

一 為臥倚頭と煙ありし和秋と同一為臥也といふ候ハ  
山花盛といふ候は山むいふ候と盛の字と心と  
ありしとやれるや倚臥とい候の亦よと心と見え  
るやと云ふとて梅の臥と驚と心人候りやれ見  
それ讀やして倚臥を候と云ふやありと梅ハ  
けりかりその方にけりなる候也  
一 同字同心の二病必去あり同字病とい句と濟は同字  
ありしと云ふと心やん候と心は同字病ハ  
詞といひくらの病ありと云ふなり



一歳旦候の年がといひあめりてく讀つて是古人作  
例の役也然とを以て新爰かりある事とせん  
いりくちよ句作さるが足あるとがけしは事い  
歳早とて今の終りハあやふ命は月れくあ春  
こゆる此道の羅人といふて又確も百有子有  
病つてとて歩つていふとてさる小松いひて風や川ん  
也是軒判詞云く春の法も終病事と旅せしは  
事不て然との也此言也是と讀して必函よりと  
いふ外おとさるは略し

程秋宗合船

春

元旦

永井走帆

の初れ天れ戸障子とてとて障子四方に志さかあり

己酉のや

永田貞柳

わあ初れ支れとて判金の桐とて後てぬとりのとて

庚戌の年か外なれ

西山惜庵

是よりやんあふりておひりじれは月とけもや白犬

中村野麥

むがれや暖候かすけは若殿榎浦とてお祭の遊遊兼の心

戌申のき

思部雄風

槌のえとふふ福神みらひひえくすく今年ハ猿田丸

樋口湖松

むうれりぬふかひりりみれ去来よりいふむら

永井権帆

けいじふじぬらうむれなるくを河にのりてゆめり色

水谷孝尚

長し月をくむゆきまふはあめりりみんて月れば

西村方剛

こけりかたぬをれあ戎まうたのき美形

田口赤松

はうひやふんああよりのあれ終あらふなり

辻江正

戸漕よとひらあゆめれあては鼻のえとくまはあま

野蓼

早春風

氷消て波のえ風井たがたをくは牛房れ終はよな案

走帆

鷺

法華経をびくすいふくえ妙を事とい唯一乗

湖松

平しふん建部しとくや鷺うたむのりくあれ

六日辰未時鳥居の邊よりとれまじ

貞柳

候し七當れ糸がしから流よ今たやけ貞との見成り  
十日戌まじより風をちりりなれ

走帆

篠乃糸よめて細けくゆると細風がけ成まじく

野蓼

候し八はる端よりの糸いおごりなれやまのまじ  
享保十二年正月廿五日立去なりまじ

走帆

わら玉糸よけとりの細ゆまじ成めりや<sup>サナ</sup>終や

春雪

まじりもあし雪れらりやまじをまじりびけり山眉

梅雪

野蓼

梅よじきあおと思よまのほは垣ありうら今ま西乳

巳月廿廿日の細緒をまじに仲煙舟のまじ

走帆

まじりぬるの糸わひまじけし何守とほり糸ゆまじ

走帆

永井氏がれ

貞柳

まの糸も何れゆまじけしなうお糸よまはは立漂

長雨

湖松

去ぬれ少くは延向てふ心昇りめんと如く七つわらひ草か

走帆

か葉是より嵐色なるをれそはさけりと増る西陣らうく

西山昌宗翁と年始のころらうゆひく

翁は位西天満  
基盤所なれ

うらふ心と涙のまはれつとぬきと基盤所の表ととぞく

お梅

湖松

紅梅の火より心と名自中と丁子ありぬのころえながも

せ玉澄き奇れ梅むとんく

中柳

見れらるに心をいれ大がくさるるを今奈れ梅の盛ハ

ゆりふれ梅とみく

桂鬼舌

ゆりふれ梅らゆめや唐ふつあふもさる梅は四方にぞ梅

梅花意といふ歌とく 空伴かろぬ 清香

いふとく 右四品乃名香の名と一首よふ人入

よむ人のやういふ

走帆

梅はさき梅梢くさめは清きけも光焼といふとらりながら

柳

湖松

餅花れくさ梅水海淵の稚子ハ門くまけ梅水

貞柳

青柳のよつれに女は年を待てまゝ酒をよと暖くは

早蕨

糟庵

春<sup>ニキ</sup>の大事をいふは人よつるゝぬがうらひ

李御

形くうとてふや旅をぬくはふらり神ていふ子蕨

野遊

走帆

平等小長来よりし行つたはふらんや人ひうり

花

谷野通帆

香煙をれ雷とつりて水素屋のいそぎとたてみる様

走帆

楊貴妃も楊りては酒盛地よりいりてうらやま

思本流水

見わくまの海よりぬれぬはうらやまの児福れ

右貯れたはるりて

赤祐

川流しをよ楊のらうとてしりやぬむんがく涼

香嫩近水

尺八のうたや守むもあかひもいふは風といふ

花見に女中とん

走帆

花と娘をいふとてんわのいふはあかひをいふ

落花

野蕨

さるる今ふ楊の鯛心登ららぬをがと尺所いあれ

走帆

行とつとすもやり奇あむよすお所とつりあいの後

帰鴈

巻ぬ我童

玉牽れ文のほあや弦向六様もさがんの四とつりい

辻河去房

尺やげよ六竹とくぬの種一両今日せくゆり丁子

野蓼

料理鍋のこもくて寄付のとれ味噴りぬあつては房

蛙

走帆

直ありえやせもさるこ鳴む六并うは下ぬらけりあお

歎冬

湖松

そく病よむのえとけふハ一分自務えこいふ味

走帆

おしつぬ病よむりきてゆらむよこい色茶屋あお山吹も

藤

野蓼

吹風いあをぬけらばれ松よくれぬるすうらの花

秀女 走帆娘

ひらさやとむらさきりあ水音しゆらまふい画一海らあ

天満大船寺れあといふよりあ〜

走帆

いりし舟に船の寺は酒のくはるるにや

桂帆

三月盡

三春といつのはやうやうの川にありぬるを

長房

こころやうぬる名おしはれ又がはるるを

走帆

桐葉ふらふらとさうどいふはけりや思ふ筈なり

夏

首夏

走帆

まじりもと来はるるいづのうへに肩をたたく

野麥

卯む

卯の女は白卯本味やまははるるをふかた氣を

桂帆

うはるる卯乃むと月影の詠り一人の月影がら

長房

切なりはま月と立ればあふ卯のむやうやう

郭云

走帆

たけふ今一ありて 動云天はくくぬきうすう  
魚くくくからばうかると 証とに鼻じりぬ風くも也  
印と根子従てどうと 耳のひに換けつとすや一併  
か一印やひ里とと 山坪の鼻もつふやさう  
はとふとひく  
野參

同いひようし<sup>キ</sup> 訳のひとがり也 山坪れいさかん  
高橋

むの中らまれこもろむとんてい  
こいやくんかきと 法少ゆそのきゆりふと  
思ひあはるく  
走帆

橋いたの中ていあ流やうねい ぬるまともやう  
桂帆

おがくはあぬ白いと 津せくじい 一ゆ一折の橋

瑞午 野參

ちの川をばくの浦のあ 標もんを我いひき  
走帆

くすくすくすくす ぬくとまれの氷井喜れ老  
大はの鼻はくれあまの人の世を 輝り 堯<sup>カント</sup>傍し

いさやうふ  
流水

ちのやうのふとく 漫かたりきんをぬき 智慧のうらなびや



六月雨

野蓼

やじれく川よかひてい宿ぬとかとく酒利うこれ中さ

流水

ひりり又軒端とそくく宿ぬ念治うらうぬぬら

走帆

六月雨のえいせれく油煙曇病の付く秋のりうら

桂帆

そら川流輪の火といはる宿は尻よりりてゆく雲

走帆

曇とほわ何て曇ふいりり人なりりりりり

蝉

谷野尚友

竹名屋の祭とかきりり夕輝れ経る万部と讀みりり

白雨

駒山

昼寝して夕より風は自然に舟傍り西瓜胴切よりり

走帆

舟のよやせれ神よこの一よりりりりりりりりりり

野蓼

思とていりりりりりりりりりりりりりりりりりり

走帆

これせりりりりりりりりりりりりりりりりりり

蓮

瓜

野蓼

徒跣<sup>ハダシ</sup>を瓜<sup>ウリ</sup>盗人の<sup>テ</sup>迎<sup>ムカ</sup>捕<sup>ト</sup>入<sup>ル</sup>れはらぬらん

研<sup>ヒ</sup>瓜<sup>ウリ</sup>を<sup>シ</sup>ぬ

走帆

乞<sup>ヒ</sup>或<sup>ハ</sup>心<sup>コ</sup>一<sup>ニ</sup>心<sup>ニ</sup>青<sup>アヲ</sup>門<sup>カド</sup>と<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>ぬ<sup>ク</sup>瓜<sup>ウリ</sup>と<sup>シ</sup>淨<sup>ス</sup>美<sup>ミ</sup>納<sup>ネ</sup>あ<sup>ま</sup>き

水<sup>ミヅ</sup>之<sup>ノ</sup>月<sup>ツキ</sup>の<sup>ハ</sup>比<sup>ヒ</sup>三<sup>サン</sup>耆<sup>シ</sup>村<sup>ムラ</sup>とい<sup>ハ</sup>所<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>人<sup>ヒト</sup>ありて

月<sup>ツキ</sup>り<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>ニ</sup>お<sup>お</sup>子<sup>コ</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>そ<sup>そ</sup>く

李<sup>リ</sup>也

色<sup>イロ</sup>れ<sup>れ</sup>黒<sup>クロ</sup>い<sup>い</sup>耐<sup>タ</sup>る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>す<sup>す</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>泣<sup>ナ</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>村<sup>ムラ</sup>乃<sup>ノ</sup>所<sup>ト</sup>所<sup>ト</sup>あ<sup>あ</sup>昌<sup>昌</sup>

同<sup>ドウ</sup>所<sup>ト</sup>雨<sup>アメ</sup>乞<sup>ヒ</sup>の<sup>の</sup>彌<sup>ミ</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>ん<sup>ん</sup>

西<sup>ニシ</sup>の<sup>の</sup>道<sup>ミチ</sup>狭<sup>ヒ</sup>い<sup>い</sup>す<sup>す</sup>き<sup>き</sup>や<sup>や</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>の<sup>の</sup>口<sup>クチ</sup>と<sup>と</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>置<sup>ヅ</sup>く

納涼

せ<sup>せ</sup>む<sup>む</sup>れ<sup>れ</sup>涼<sup>スズ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>を<sup>を</sup>人<sup>ヒト</sup>の<sup>の</sup>井<sup>イ</sup>原<sup>ハラ</sup>

勝<sup>カチ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>

走帆

竹<sup>タケ</sup>床<sup>トコ</sup>几<sup>イ</sup>地<sup>ヂ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>お<sup>お</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>押<sup>オシ</sup>す<sup>す</sup>き<sup>き</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>店<sup>テン</sup>

祇<sup>ギ</sup>園<sup>エン</sup>の<sup>の</sup>茶<sup>チャ</sup>店<sup>テン</sup>と<sup>と</sup>涼<sup>スズ</sup>て

桂帆

松<sup>マツ</sup>言<sup>コト</sup>紙<sup>シ</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>れ<sup>れ</sup>夕<sup>ユフ</sup>涼<sup>スズ</sup>と<sup>と</sup>風<sup>カゼ</sup>一<sup>ヒト</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>り

秋

立木

走帆

又<sup>マタ</sup>月<sup>ツキ</sup>とい<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>より<sup>より</sup>神<sup>カミ</sup>心<sup>ココロ</sup>涼<sup>スズ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>林<sup>ハヤシ</sup>乃<sup>ノ</sup>風<sup>カゼ</sup>乃<sup>ノ</sup>枝<sup>エ</sup>落<sup>オチ</sup>状<sup>カタ</sup>と<sup>と</sup>そ

七夕

野暮

石中虫をぬくくと織女と彦星とを祈るの歌をよみ  
瓜菓子星も向んあまのくさし一度のらまら也  
七夕あまのりやのこひつらまららのんねのなく

我童

色も月もあつて道理星のひまにこひの一夜青も

流水

秋風の吹も秋も秋の心かりこりも終りなれ七夕の意

情菴

今の世は七夕あまのすもむがふありまらねはよかふ

郭翰とひりかろ人もシヨクナシヨセイ織女タナハタ定る

らまらてわれな七寶の礼を海をよ

故事とこひびて

走帆

七寶の礼もや心も素瓜のひん星とあつこよひに  
すれあふた者あつてこらやあふ七夕はあのにしり今と  
か星もくかひあ月のこりき油をんをらこりわとあん  
こは星りいつりかや娘女の老母よがらぬ不審うとなる  
重紫シラカよはく七夕は紫もわあまもや病のわつこの星  
七夕祭イマサ浪者と極乃盛物をよまら

星のひやといらうお園よにやもむしきれはりるお

桂帆

と育ん牛ひく星し激作の翁よんも池コシなるは先

貞柳

とひせずね弁と星にまゆんともおのやまきと短冊

雪乃

一年よき月女一ふりおひお思はかの酒乃かよふお件

方洲

は乃あれと育のひ秋の長星うそれ舞うる秋なるい

山元

七夕よるお月よれ赤赤瓜の腹のういじまや中へ水色

七夕後朝

走帆

おれらるひひもいもむく河瀬は八なりは渡り舟む

桂帆

七夕れはの秋乃又月いうそくもれりかたりきり

森

野蓼

餅よと赤隣うるひや音うれ此所の夕日名系森の花

彌

桂帆

ゆりゆりしるは顔よれ赤空は髪初けしはあめ風俗

走帆

枕花れ仲いひあそぶ踊るふいふ八行の歌部

こころを舞の踊りかきや人のいづりなれ

野暮

あらしのまじりまじりまじり踊るのふり半ははれ

を文

大磨

盆といひがまゝ人のいづりまじり又十女れまじりゆれなれ

月

走帆

浮きとつよのえいふは清光の月をうらみれ男をえ

桂帆

月のこころいふなきふとて飛出さしめ婦娥乃菜魚人

流水

雲のぬれとをれ秋は丸裸こまや月人男りかふ

右直

秋のれ月を金にぬきとる踊るいあはれ

赤社

千金れ打いさしめあのや切れこころ月

八月十六夜

名をうけ月をこころいふ勝り方ありしよわと

友のいひなれ

貞柳

ねりよかほいぬいそく月をうらみれ男や月流

笹田一直

名月いあしれうなせどあさげはりくたの魚といふ

系帝

鳥い倦よ人の音ありらびせれ名月なるあせらあれ

走帆舞のりくよよれがりて

李心

沈了れ泳らりるくくふやがりはの里辛れ月

せり

走帆

月足酒がやとれがなまはる垣<sup>こか</sup>の辛と府の地<sup>ち</sup>りて

やしく月と西のあふよれが

徐<sup>じゆ</sup>とがふくわをまひし月<sup>づき</sup>の清々<sup>せいせい</sup>のうら

こゝの月連日の雨は清光とくしるむれを

せりてくやとら辛とくは酒砂うて

由<sup>ゆ</sup>づり<sup>づり</sup>と<sup>と</sup>府<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>地<sup>ち</sup>若<sup>わ</sup>て<sup>て</sup>月<sup>づき</sup>人<sup>ひと</sup>男<sup>おとこ</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>ん

府<sup>ふ</sup>密<sup>みつ</sup>三<sup>さん</sup>升<sup>しやう</sup>きとくひつとく無<sup>む</sup>とくわ

吸<sup>す</sup>ゆのむれ

園<sup>ゆゑん</sup>こ<sup>こ</sup>た<sup>た</sup>敷<sup>しき</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>月<sup>づき</sup>酒<sup>しゆ</sup>睡<sup>すい</sup>くとくむれ吸<sup>す</sup>ゆ

立<sup>た</sup>侍<sup>しやく</sup>月

李心

た七<sup>なな</sup>れ<sup>れ</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>仲<sup>なつ</sup>人<sup>ひと</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>や<sup>や</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>武<sup>ぶ</sup>庫<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>は

九月十三夜

湖松

十一

まゝ今月の秋は色も似てつくやうな色もなす

丁度なるやうな

野暮

秋の行くと青れ月も色も深地さういふ色の音もなす

日雨ゆり夜ゆりて月もなす

走帆

雨のあつては秋のさういふさうな年一は夜もあつ

魚

野暮

時遊人の人相もなす礼もなす秋もなす横城もなす

夕吹和霜利似力といふ詩句とどりて

走帆

夕吹の力でもとやなすくといふさうな林のたつ

林夕

見やせハ浅くも秋もなすなりなり裏の信屋の林は夕暮

藤菊

糟菴

賤のなす咲ゆる菊なりなりて夜もなすはことぬい

元慎、此花用後更なすといふ秋の菊も

むのらめなりなりと詠とて事なりと

走帆

林もなす秋もなすはことぬい

野暮

せようくのじやたをう菊の園うの侍場茶碗浦と枕よ

貞柳

大坂の南に山をたふねた道の菊は打てそよのそ

去れ日地といふ名菊とりひて

李

名をゆー春の花をここのむにうらふよと泳ぐらん

お紫

湖松

朱とさうやれう所のお紫にけしとそよめくそ

冬

初冬

蜻菴

折をたう天と極白のんか月さうみ字と始められり

貞柳

沐背とややとこれ極のびと世にふくみ月とあは

走帆

林とれ後木紫おとがの春と初らなるかこれゆや

李

今日らうらうらうらうらうの京自りあふあふとふとふらん

野蔘



林をくぐり一軒あけし美人の如く河を渡る初らりて

時雨

流水

を流くより月を傘にまはせうと云ふ河を渡るは

孤帆

本がくはらりと流るの音のきこえはこころをこころと云ふ河を

羽翰祭

走帆

祭とて遊治れ小坊の髪よ出立の酔ハ洗濯子ハ

千鳥

あらしらふよやちをねらふ神の浦々をえんぬの

清雷

糸あはれ酒のいろはあはれあとき香や酔ひて

貞柳

朝やちる月の月ハ入舟一田葉りそあきくち

叢

長房

かき返やこころ柳とていけん酒を愛れうさよ柳子

走帆

足くし思ふ是やまの玉を愛るくよれうと河を渡る

水仙花

罌菴

お名れ中よきして笑ふや舟すまへんやうあはれを

湖松

水仙と移ぶるむせうぬの糸まきうてひりり

走帆

むあまなまきやう水仙糸まきひりり

桂帆

菊のほむ形といふ元徳の人の死をぬく

大魁

大磨

火のほむ大魁の神のまきひりり

紙子

走帆

冬陣よ四十八枚貯きこく紙子の綿れいつら

凍夜

打もははるいともれその結うや鬼が

歳暮

野蓼

菓子袋川より煤の越るれをまひひり

赤袴

年にもなせまはるく檀の浦部とてつら

首ト

手はれ掛はれぬ掛よりあをそをさび

正帆

破魔弓矢りともを掃りし子の餅もろ

申のくれな

方洲

さかたにんりこの年れんまよふ定めのなれんあまのまら

これよりあま

糟庵

と人の志がなれ申れ年々くは家方いふりけり

同一幕

走帆

一とせはなま尾ながれ申のれけやふけり日習いぬを  
長枯のむ乃綿れ織どあそいけりゆめ年れをど走

是良桂帆はは里れ年々後を勸ゆる丁内多

かへしくも坊めては幕なりと長き絶れ

かうけり桂子にらりそくふんけぬ

ふ事ゆめ坊あそいけり障なふ歳暮とはよきもの年

賀

若原氏の少者八十八の賀はあまの少者成きて

ぬかりなれは五二算とともさけぬ

走帆

ひよりあまの少者とあ初ては万倍の敷あけりめ坊

享保辛丑三月十日有布うふ環うりの賀は

壽宴といひさき

西より酒をみらとせりり桃王母れ付とふれは永井喜

布う有氣祭の賀は

永井喜は又敷うとくふは振神の守りとうけあふか

走帆舟のまゝ私入を笑して

流水

四海浪風と陣よ走舟帆の追よよけまひみうり糸

同笑

正不明旨

追風の舟と帆よあけく走舟みま笑つてうけ入福壽丸

同笑

和回忠笑

永井喜れ祝儀よ弁と心念うけ一筆うわけ笑うは

う

走帆

内祝儀の心ありてうけぬら一入或吟はう笑うは

永井氏字又取と建始の門糸ましく

心よりあつた神をめでた祝ひ

野蓼

これ舟の代に徳の門入うあ祝も枝糸をうりて

右林右節翁六十歳よりはうけ

和歌并詞云

人之壽者天元六十地元六十人元六十

共一百八十歳能調護則形共神俱

而盡其天命とあり糸又も是く信と

うやうよの祝ようりて和弁一首と綴り

西算とよまうり

走帆

天元の一よりりて多ふらふとる方歳れがらりてなれば  
我童又新宅移徙を願してトはらけ

和年并詞書

用合音便れれつひひのよる物るれハ  
ほつがとくやふかきくけともいをこりし  
多れをむのをれよふやれは約宅よわ  
ゆしとく家る風ををころとれ揚れを  
めてきとくもなとらりぬれあなれいあが  
かふあひらちあひそとあまとのし音

が家ら

おりかひますの家居よさらひてとめては家よあけり  
かなり也

家書

らり此又音はありあけりて宅とあてをこりてあ  
大和屋のあけれ出世と祝ひ

流水

此出世のよる保の松原は高く泳れりとのやまを  
表林生六十が家よ家業よとせくともあそと

トつりし

走帆

飲るるをこれほゆりよ所務の松るよ代と行んじ

成直御七十と賀し

かく内と壽福揃てゆくと、右本柳成直なり

流水生れり氣入をかきして 流商賣がれ

高常れ存て心んを菊の露とてあて流るゝ水や美子世

同賀

桂帆

三味がぬ酒まの同じ福徳とてけしよとて人誅必度

同賀

貞柳

解んや目やち梯一茶所千石万石形とてあ入

同賀

流水

おとよをいふより大とて氣祭神の身りと松乃木柱と

西山昌宗翁の六十賀し

走帆

末がう紀龜の尾といふあ山翁万年あう上祝の口誦

孫娘つとむが徳を日れ祝よまじりて

祝ひ年かく曇るよ雲起り出世の託れ末とてけし

孫娘嫁しれよ名と徳とつけ

よ名とてんやとつこはコシ万歳と祝てダイ祝文ウあか酒和

同賀 キるる賀れ

糟菴

生れ子も名よけへるこくくと乳よの心智恵れあふ

嫁し柳の目あか

正帆

かやうの神の御子にぞかきあはれぬ  
是商賣の人を求めしはしほりて

走帆

細丁一丁の御子にぞかきあはれぬ  
新清水の茶店にぞかきあはれぬ  
酒徳よをせくは敷とよふとぞかき  
泥酔れ濁りてとよふとぞかき

神祇

走帆

天照の皇孫と日向の守りて  
大切れの天女とて  
四とてしるは流るるに  
神道とせよ大板原の光とぞかき

我童

正直れかうとて  
神月月初あり  
くらきか

心立酒神ありて  
心立酒神ありて

釈教

走帆

一心よ航とこめけ禱りかうとさうのけりもあつとれ  
観すまひ唯一字よとまらぬいそくや答れぬる空  
五病卒智の我がこころのあつとゆはんの沈滞りか

我童

次より道とはよれかんといらし佛のたふ糸のく

戀

初恋

走帆

そのぶれ日敷のうらにひそん七十有恋れんり也

恋恋

やうくやこよひのあまのを耐年月世後をやこびり

不逢恋

我恋を昔年の掛れ忘け残るにばるるぞあつとれ

寄扇恋

骨わた恋はあまさが要なりこよひの出あつとれ

晴帆



我恋ハガク志者乃廟をわく君を松のりり地

寄道恋

野蓼

尺おちりとらんを置きりせし道かられ道とえ恋れいら登

寄鼓恋

貞柳

小鼓の音よははそぬ下思ひひまよふ地の人くらと

也

走帆

瑛納の君みおひの大鼓納を名や門乃くららま

野蓼

我恋ハ鼓をとりてれ右鼓孫とくらなる門をのふ馬や

方洲

ちり屋ていさうひがよ下と鼓わす柳よとぬん志のい孫

帰帆

我恋ハまゝ指のぬ下と鼓心はくをわびらぬならをわ

汀帆

小鼓れちうらうらうと志の志むじき六ら月ならりぬ恋

流水

ちり屋と恋よいやくけおまらんをくら右鼓うら

被上八分作ていすまのきハ

走帆

打はく福あまう物とまぬ八分ならるるをこぬ

寄甚恋

野蓼

濁し月のありとくし竹さひよの君よあひ基れ雨も越えん

流水

かげが紅賊の心の白忠とせりそのまに打あしお

寄将棊恋

野夢

馬の道と君心とをけね棊のひまけにかららぬ

寄太刀恋

走帆

をらりよ我の心られ後家頼よまのかりかるとまうし

寄筆恋

あひりし沙意と強筆かきうまうま今も情けはぬれ

寄餅恋

しりおれ心いつとそく尻餅と徐くがくひのりきる

寄食恋

我童

食りりし平はうぬいしつらりて腹う大恥もなれ

寄源氏物語恋

走帆

勝舟よえとまぬ恋と顛<sup>カキ</sup>りて遊ハハとく鼻のく食

糟庵

傾城をか金浪よき流るる多きとあそびかをれ大将

夢

情がやぶりのけと夕霧よやう屋の心なぞとま

寄紙子恋

大磨

稲夜の水にうらぐらぐとてうらぐらぐとてふたふたておとせ

走帆

向くとこねと背より稲中八代ヤウロの小紋紙子ねがらり

寄相撲恋

糟庵

むらぬらふよりあひはばゆいささささのまけお撲り

走帆

柿まき通てふとさなれ流しあのお撲りけの情とさやいん

流水

ほのかに命あつてふ腹をうらぐらぐにわかれらる

雪柳

打こもくえれれ一さささのまけお撲り

貞柳

ねのけこぬねこらりまけお撲りまけお撲り

寄橋恋

野蓼

わけ渡のあつぬこらりまけお撲り

秀女

宇治橋れうらぐらぐにまけお撲り

玄林

賤れ女にけれぬまけお撲り

通帆

恋のつらさを年踏むに心をなげかす

寄 西瓜恋

蘭室

瓜がれ西瓜の皮はいわれ物ぞよひ念者よとく風をた

遠里語風

及いふれ恋のこころぞ鳴る風わが心はきかぬと人

近水

よよ金さねくきくをたねの世ありてわめくと愛

一直

ほろろいふとらつと恋のこころはなれとていふ

流水

毎一刻ごうとたれおの瓜のつらさをとていふ

寄 佛恋

野蓼

まゝまゝとく念仏のこころはなれとていふ

走帆

恋の道釈迦よせとていふ

羅漢

哀傷

山田孝翁の母を世とていふ

走帆

こめぶきり浮世とわらふ茶此志らくと守二年の夏  
あひまをこれ呉服屋の身よりもとてやうて

法性の系孺子と今さらりゆわつら抱おつといふれ

濃田屋のゆれ死別といふ

濃田屋これ安心いふる縁をばけりせいさきたん

世をくらゝれ

夢れ世や電光らよりかぬ人ひひくむらゆわなる

本懐

博覧

くれ危れ危なりは頼りのおとく人あひめせ

走帆

竹馬れ友らう路く皆うせく山の大将とならせ

水のそれ男盛しありあとかる劇劇や老を

野夢

見とつれはあつわのそまが火煙あつたあのみ

走帆

ふれやうひゆるりあは火煙友らよりまら満

寄将泰本懐

野蔘

世のつれなきはくお探りなれり由れば京都づら乳

寄山椒本懐

走帆

山椒ののきせりつらひをちやぢり起る松竹八景

舞旅

西國にれりつ河のよれを

流水

お流をたてりん志ゆあびてる智恵とどろあ

四石忠度れ腕塚

かひすいし打きぬりたを度るち力をせりやつるり

み鳥しまりし河にれ家居とら

走帆

湯のふと海濱の佛衣をむ屋にそりる三重の家

南都より来たつらとて依保のうらま

湖松

きいてくはかの河を流るるつらぬかたは是のまあ板

伊勢のあまのつら

流水

賑りと道はいつかて来んけの道のたへるあまやん

江田のりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

走帆

公用れいりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

平位里の年々後と勤るれ下句かくふ

雑

西山昌泰のりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

まうけ碑のりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

あはれきさほし 鳩鳩のりりきさ

走帆

玄徳ひりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

おろし雨風と雷一あはれりりきさ

けうしや竹の地をあはれりりきさ 鳩鳩のりりきさ

走帆のりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

掛絵のりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

あはれ

野蓼

うしろを我らひりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

あはれ

走帆

うしろを我らひりりきさほし 鳩鳩のりりきさ

天王寺立花の云よりうらぶ京近藤外也

挨拶

湖松

年を越く人の跡をたむく道にゆきこころのまじり

生約氏為支平のれ等とこころのまじり

成冷あつしゆりゆ下りけりけり

あふりけりゆりゆ下りけり

ねと合をて厚情の方と謝しゆれ

なまじり

走帆

山と寺を記せ約の志れは河よのれは悲があつしゆ

いゆ心言いは身は因のゆくにいふもなまじり

走帆 舟へんをいづるしゆりゆ下りけり

あつとゆりゆ下りけり流水とゆりゆ下り

川崎屋とゆり

流水

とゆりゆ下りけりあつとゆりゆ下りけり

あつと

走帆

舟のまじりゆりゆ下りけり川崎や水れ流るゆり

ね等合の志れゆり走帆巻ひなりけり

ね等子赤面帽ゆりゆ下りけり

ゆりゆ下りけりゆりゆ下りけり

ゆりゆ下りけりゆりゆ下りけり



しつがれさうん又表以

といつてはさの面々をそと舞へてつうは

野蔘

表が死んでさうさぬをり發見さうけりてあくし

せし

走帆

けし角わつたなあの復たに笑ふもさうか言ひんさるる

話さぬくさ乃年れさうし作をさういふさう

ゆつれやけし角とけし野蔘の糸号なる

面々くさ

流水

年うへに氣のあつてこの面々いふさまればさうなる

せし

走帆

糸年へゆうこがり年と句や心傳説さうゆつる

玉とた官所さく豆腐料理とさうなる

遊松

上様のお友所さく豆腐さうやおうとひさし

野蔘の竹馬の友とてさういふからぬさう

わくいねさうさういふさういふさう

わくいねさうさういふさういふさう

ゆつれさうさういふさういふさう

すさ乃道を懐とのいふさういふさう

いふ心と徳名よとせてしつうりある

走帆

此作方は及ひまをせしめしむるのまを奏する處といふん我らも  
せめて徳よとせしめしむるありしれまされまきまの  
何れも用ふつ奏するなりん此なる先ハハハと  
此の心切なるまをせしめしむるの心切なり  
いと海なるにやういふぬちのめのかるれを  
此のめされはばとるれ味いかり神をのり  
と徳名よとせしめしむるまをせしめしむる  
娘とて又いふ心切なりしはるなり

野奏

新よふかひあらぬまを奏とこのまを地やな

西の卯月廿日象尺ゆき月くりて

走帆

大象とまよひははれし凡そ原志け

象ハ仁獸なりし布在方策

色なりちれハ

慈悲心よまよひとて小象

西のそしゆりあへひけ

いさゝかといふは卯月のサロ

野居梅光孫の音曲とや

音曲は舟の白ひをきうらに伽藍

をきりれ東方に廣き志あり

たうらうとて威徳院といふは若

八日の金神のいさむるをくまのとい

陽子にちやうとくまのいさむるかく

けり

威徳院ゆゑの音曲は金神はるふ東方にとんせぬふ

西山宗同初ら天満は家坊りの阿鬼門といは

そ地をなすうらに竹と種をけり今にさうら

介林となりやうのあしはゆらとて

梅翁も詠吟の友とてゑれ所はるれ東方に竹

本意寺殿内寺田之角といふ人の相弁とて

あきくつりけり

作のまき寺田はあのかやうとてあきくつり

七夕各詠の巻とてうらとてけり

野居

水泳しつゝ一夜あつんとくさくさありつゝ七夕れ集

うー

走脱

七夕れ前ハトおれ川おれ宿守寸今ナクテ帰きり

齒れんかんろは豆腐と黄味して

ぬけし世次とつとそねつと歯脱豆腐とく物もなれ

六ナハあつと歯落うに歯くしてかこのあり

あぶつとつとあつと玄人納豆とくねつとつとありて

おのつとつとつとつと永升氏つとつとおあれ納豆

くさ茶とつとつとつと

くさ茶とつとつとつと又茶力れおをそのじり

住者れ茶店程はなめんといつた女とつとれ

カ敷りのあつた

情巻

あつたあつと女あつた女がふつとつとつとつと

右のあつとつと

走脱

があつとつとつとつと女とつとつとつとつとつと

あつとつとつとつとつとつとつとつと

貞壽といせまうつとつとつとつとつとつと

神宵中旬我は里の會所標とよ

あつとつとつとつとつとつとつとつとつと

表海りかなる前かたつとつとつとつとつと

おせんといふと源流の心やうくさうく裏をばす  
ふれとあるふに似て園中よ案をうと建て

流水

表表の氣しそりぬきさゆめうらふはゆり耐とうん  
花鳥の福生院常念佛よりうて

やうな福生院のありくかひもさゆめのがさるん  
三番掛法の賢弁并月去

り見出てこれと趣向さうましかうあふ  
みやうとあふあふいさあはを  
ゆいせう

走帆

耐及れ肩の白髪をぬきさゆめうらふはゆり耐とうん

屈原

我をりさゆめ噴氣といんや屈原とぞにんれぬふ

同

桂帆

濁世も濁りて糖とまきそ理屈原とぞをゆふ

女郎花と桂枝とゆふさゆめうらふはゆり耐とうん

ゆきま

走帆

さみゆき 桂枝とゆふさゆめうらふはゆり耐とうん

墨部雄風翁のあはれいんあふらふ手製の

寄香油とつらふさゆめ

足川のやぶぢい河いころ系わりて入るは妙よさかきゆ  
を

雄風

秘酒女ういさにら念にありと寄あ油わりてうとて見ん

御お備えは納浪を會所持前一行司れん

走帆

うけくもらふそ  
準備のお食代は再進ハ辞候もなるまひけては

野麥前より牡丹をとりて  
お替れはまよけらゆは人草同くはらなる先中は礼を

かきあはねを方飛し小お宿氣ととりはとをり記し進ん

野麥

を腹よがり夕飯まであつてはりあ餅

をへらふおしり學童の魚子と羽を聞え

走帆

愛ははれはれはの餅はき一餅を記し休を落知か

走帆

を  
只一餅とを後あつさかこ餅夕會しやれ新んとて

走帆

木の船倉とんく  
貞柳

走帆

これ二餅と見やてを以はなふく一首おしはるはせ

女史丸と云某賣れ史婦づきかなるが

走帆

わしりらま

わがうらなう記名とならん女主人中の歌やけく常々拜  
名所山

野蓼

ふれど山の名を記さるゝかや伯母といふまめ所や呼

同記

走帆

わが子浪日老らふあまを金にわれくはまが志望のり  
平海伎芝居也人ごれ後者とらん

流水

死んで見たりせうのり相をれは浪名にかきしはまは  
浪屋のり有馬入湯の附宿二の湯大黒をゆえ  
見直よ人つるはを

走帆

目せしれ一も浪屋

川せ病子宿ハ大黒

夜寝かきせり

そくは六盤と借り

来りまらつるは

雪の

あまをりやうをまらるゝのり壽命七つとゆるとい

負柳舟池煙舟のみ字と申孫由次が夜に

あまをりまらるゝは

走帆

池煙舟とびくかろりれ園んはうごや一色がゆ

舟

負柳

りの園をりまらるゝはあまの心つらりの我ららるゝ

琉球草といふの生まらるゝは志ろれ水雲

よみよきわなれ

湖松

四十六

名ありお丹波表の雲ありしやうきうきうきと風味厚れ

永井走帆堂八幡道者なるありて七十八

乃少と尊のつくひをさへ又ハ和舟に

ありすきと分かれ

負柳

手し手なりはし平に命ふがわぬお古今柳のふ人よ

也

走帆

かくをいおがは竹のゆき

既物喪志とけりるをれとが根系と

ゆらゆらとさし下れ道と懐くおとと記

和尚ボありあけりて地とと

高瀬ありて日

走帆之海舟跋

大坂心斎橋筋交差前南

河内五茂齋

享保十五庚戌年六月令辰同十一月吉日刊之

同兵服町

大隅元藏



